

題：

「ここ数ヶ月の小中学生の相談会で感じたこと。コロナ禍、ロシア、ウクライナ戦争がもたらす恐怖感や絶望感に触れて、ホメオパスがいることについて」

この数ヶ月。10代の小中学生の相談会時に、

「ウクライナの戦争のニュース、元首相の暗殺のニュースとか不安になる。ただでさえ（マスクの強要。黙食とか）学校がしんどいののに…」

「ウクライナの戦争のニュースを見ていると、このまま普通に学校に行って受験のために勉強して…と、日々大人から言われることをこなして『それでいいのかな？』と不安というか、虚しいというかそういう気分になる」

という主旨の言葉を主訴の話とは別に聞くことが何度かありました。

この数年、彼らのような10代前後の年若い子どもたちが置かれている境遇というのは、いわゆるコロナ禍とされる学校生活だけでなく政治や国際情勢の緊張感、不安感や将来の展望への絶望感など、察して余りある状況にあります。

私自身もホメオパスとしてだけでなく、高校生と小学生の母親であることから彼らの先行きについて不安や憂慮が全くないか、と言えば嘘になります。

その様な時。ホメオパスとして相談会では第二次世界大戦中に中学生だった祖母の体験をを彼らに話しています。

「第二次世界大戦中に小学校高学年～中学生だった私の祖母はね。学校といたらまともな授業なんてやってなくて、勤労奉仕だとかね。国のために働く事が授業のようになっていたんだよ。でね、ある日。少し郊外（大阪市内の自宅ではなく少し離れた高槻市）に疎開している妹たちに配給のお米を届けに行った帰りにね。大阪の中心。中之島の中央公会堂の前をバスで通っている時に、空襲にあったんだって。空から爆弾が落ちてきて、周りが火の海で。どんどん爆弾が落ちてきて爆発して「どうしよう！」て時に。「はっ」と、中央公会堂の地下へ降りる入り口が見えて「こっち！ここに入り口がある！」と、腰を抜かした人を連れて、そこに飛び込んで間一髪命が助かったんだって。

火が落ち着いた後、歩いて自分の家に帰ったそうなんだけど。結構な距離があるんだけど。どこをどう歩いて帰ったか覚えていないんだって。でもボロボロになって帰った。家族は空襲があったようだし、帰ってこないから「死んだ」と思って諦めていたんだけれども、帰ってきて「うわー！帰ってきたー！」て驚いて喜んだんだって。

なんかね、そのおばあちゃんは戦争の時に子どもでさ。もちろん戦争なんて望んでないし、大人が勝手に決めたことに反対も言えなくて、ただ怖いことが望んでもいないのに起こって従わされて、家族や友だちが死んで…なんだか、今の子どもたちとすごく似ているな、と思ってね。

「なんで戦争なんて？」と思いながらもその日を生きるしかない。

今、コロナがあったり戦争があったりして身近に感じただけで、日本以外ではずっと世界のどこかで紛争とか戦争とか、貧困だったりがあって、自分で生き方を選べない状況でも生きてる人がいた。日本にいると気付きにくかったけど。世界ではごく当たり前にあったんだよ。いや一見平

和な日本でだって、辛い状況の人はいたと思うよ。

だから「仕方がない」「何しても無駄」で済ますんじゃないでね。

世界を変えるとか、ひとりの声では届かなくて自分には何もできないな、とか思うけど。

どんな小さいことでも自分にできる事、したいこと、やれることをやるしかないし。そうやって生きるしかできないんだよ。

先生のおばあちゃんもね「なんで？」と思いながら、できることをやって必死に生き残って。終戦を迎えて、大人になって結婚して…お母さんになっておばあちゃんになって、何年前に亡くなったけど。

戦争の時に死んじゃってたら、先生もその子どもたちも今ここに居ないんだよ。

それって凄くない？

あなたもね、そうやって生き残った人たちがいたからこそ、今ここにいるの。凄くない？

怖いこと、望まないこと。自分ではどうすることもできない戦争みたいな大きなこと。起こらない方が良く、なるべく起こらないように頑張るけど。それでも起こっちゃうことはあるんだよ。

先生もすごく怖い。でもね、そういう時に先生は自分のおばあちゃんのことを思い出して、

「おばあちゃん。大変だったね、辛かったよね。それでも生き残ったんだね！凄い！ありがとう！」
て思ったら、自分もできるんじゃないかってちょっと元気になるの。

先生も戦争怖いし、絶対嫌なんだけどね！ 悲しいのやだよー。

怖いけどさ。努力したことや、やったことは無駄にはならないよ。生き残ったらいいの、一緒に生き残ろうよ！」と伝えると、とても真剣に聞いてくれて、

「あ、はい…。そうですね」「ちよっともやもやが晴れた」と言ってくれたことがありました。

新型コロナウイルスのパンデミック。ロシア、ウクライナ間でも戦争が起こり、大人だけでなく子どもたちが抱える恐怖、絶望感は計り知れません。

価値観が大きく揺さぶられる中、大人だけでなく子どもたちもまたその中で「どう生きるか？」を問われているように思います。

子どもも、いつまでも子どもではなく日々成長し、いつかは大人になります。

今のこの経験が彼らに「どのように生きるか？」を強く突きつけている。

大人も「子どもがかわいそうだ、かわいそうだ」と憐れむばかりではなく、彼らのこれからの生き方に対し、自分自身もどう生きるのかを問われている。

子どもたちをいつまでも「ただ弱い、無知な存在」とするのではなく、「同時代に生きる同胞」と捉え、ともに成長する姿勢が大人である我々、ひいては「魂の成長」をともに目指す姿勢が我々ホメオパスには特に求められているのではないかと相談会を通して強く思うとともに、日々の相談会へ臨む姿勢を新たに、これからも努めていきたいと思いました。